



Vp.p. の2用法 + @

英文法入門②⑩

- 準動詞としての Vp.p.
- 形容詞用法
- 副詞用法
- 名詞用法として使いたいときは？
- Vp.p.の意味上の主語

準動詞としての Vp.p.



- Vp.p.はS以外の文型を持つ
※このとき文型は**受動態の文型**
- 全体で**形容詞、副詞**いずれかの働きをする
= 常に何かにかかる
- 慣れるまでは、**常に直前にbeing (be)を補って読む**と理解しやすい
- 否定するときは not Vp.p. の形
(あまり見ない)

Vp.p.の形容詞用法



- 文中で形容詞として働く
= **名詞にかかる OR Cになる**
- (名詞にかかるときは「Vされる/された名詞」と訳すとうまくいくことが多いが訳で覚えてもあまり役に立たない)
- **1語の場合は前置修飾**
2語以上の場合は後置修飾

英文法スライド⑧
「冠詞と形容詞の基本ルール」
を復習しましょう。

Vingと同じ！

Vp.p.の形容詞用法

He touched the broken mirror and cut his finger.

形

「割れた鏡」

The tradition told by the patriarch proved true.

形

「族長が語った言い伝え」

「長いものは後ろへ」!

後置修飾の時、Vp.p.がかかる相手はVp.p.から見て(受動態の文型の)主格の名詞です。
(つまりVp.p.は必ず完全になる)



コラム：<SVC>? 受動態?



Photo: New Line Cinema

be to V構文、進行形、受動態など、be動詞の直後に準動詞が置かれる形では<SVC>との境界がぼやけます。be to Vの場合と進行形の場合は to V と Ving に名詞用法があるのでS=Cかどうかで判別が必要でしたが、Vp.p.には名詞用法がないため必ず名詞であるSと明白な＝関係を作ることはありません。

ただ、Vp.p.にも形容詞用法があるのだからCに形容詞が入るタイプの<SVC>は受動態と区別できないのではないかと考えられます。実はこれはそういう解釈でも大きな問題はありません。Vingの進行形も、CにVingの形容詞用法が入っているタイプの<SVC>とも考えられると別のコラムで書きましたが、これも同じことです。ひとつ違いをあげるのであれば、<SVC>のときはCの前にveryを入れてCを副詞修飾することが許される一方、受動態の時にはそれが出来ないことでしょうか。(Vingの進行形でも全く同じことが言えます)ただ、これも動詞由来の Ving / Vp.p. が独立した形容詞として扱われるようになったものにも very での修飾が許されます。(主に感情動詞の Ving/Vp.p.) 結局は受動態 (Vp.p.) か<SVC> (形容詞)、どちらとしてより強く認識されているか、という問題になりそうです。

- He was very happy with my report . <SVC>
- He was very satisfied with my report. <SVC? 受動態? >
- ✕ He was very given my report. <受動態>

Vp.p.の副詞用法=分詞構文



副詞用法は以下の5パターン

- ①時 : When, While
- ②理由 : Because, Since, For
- ③譲歩 : Though, Although
- ④条件 : If
- ⑤付帯状況 : With

意味はばらけているように見えるが「副詞節を作る接続詞が持つ意味」という点で共通。

実際に分詞構文では基本的に節への書き換えが可能。

厳密にこれは「時」用法、あれは「理由」用法と区別して認識されているというよりも、副詞節が持つような接続関係がぼんやりと意識され、文脈によって補って理解されるイメージ

Vp.p. の副詞用法 = 分詞構文

困ったら
「～て」「～して」と読んでみよう

① 時

Called by someone, I was listening to music, so didn't notice it.

② 理由

Dropped from the desk, my phone got broken.

③ 譲歩

Given another chance, he still wasn't sure if he could make it.

④ 条件

Seen from the sky, this island looks like a whale.

⑤ 付帯状況

The old car is my father's, left broken.

<SVOC>のCになる

I had my hair cut yesterday.
S V O C

cutの後ろにOがないことからこのcutはVp.p.だとわかります。
(be) cutなので切ったのは誰かさんで、切られたのがmy hairですね。
髪を切るのは他人なので使役動詞のhave <SVOC>を使って表現します。
自分で自分の髪を切る人もいるでしょうがそのときはもちろん
I cut my hair.でOKです。



Vp.p.を名詞として使いたい場合



- Beingを前につけてVing扱いし、名詞として使う。（Vingには名詞用法があるので。）

I want to forget the memory of being scammed.

詐欺にあった記憶は忘れてしまいたい。

Being trusted is equal to being bound.

信用されるというのは束縛されるのと同じことだ。

Vp.p. の意味上の主語



- 独立分詞構文（Vp.p.副詞用法で、Vp.p.の意味上のSが明記される場合（全体のSと異なるから））のときだけ意味上のSが書かれると考えておけば問題なし。
- 形容詞用法の時は基本的に受動態文型のときのSにかかる。

独立分詞構文とかBeingの省略とか。



VingとVp.p.の副詞用法のことを「分詞構文」というと説明しました。分詞構文の意味上のSは全体のSと一致し、一致しない場合は意味上のSを明記するとも説明しました。さらに、意味上のSが書かれないにも関わらず全体のSと一致しない慣用的な表現を「独立分詞構文」というとも説明しました。

実はこれは**ちょっと嘘かも**？どちらかということ分詞構文は「**従属接続詞が導く副詞節の簡略化表現**」です。だから意味が全部、when（時）、because（理由）、though（譲歩）、if（条件）など副詞節で書けるようなものばかりなのです。で、これらを簡略化すべくまずは接続詞を外し、論理接続を文脈にゆだねます。次に接続詞が消えたことで余分になった動詞を準動詞beingにして格下げします。これで主節動詞と接続詞の数の矛盾は解消（詳しくは接続詞のスライドを見て。）。この時点で準動詞化した部分は「**S being Ving/being Vp.p. ~,**」という形になっているはず。このときbeingというあってもなくても困らない雑魚動詞をさらに省略して表現を簡略化する。「**S Ving/Vp.p. ~,**」こうなりました。これより簡略化することは難しそうですが、さらに踏み込むと出てくる発想が2つあります。①**Sが全体のSと同じなら書かなくてもわかるんじゃない？**②**よく使う慣用的な表現ならS書かなくてもわかるんじゃない？**①に発するのが、Vingの副詞用法として説明した分詞構文。意味上のSを書かない場合です。②に発するのが独立分詞構文として説明した慣用表現です。（ちなみに一般的には慣用表現に限らず意味上のSを書く分詞構文をすべて独立分詞構文と呼ぶ。）

というわけで**文法の世界はあくまで言葉の規則をわかりやすく整理したもの**。本屋さんで本を並べるのに**作者順、作品名順、ジャンル順、発売年順、人気順、出版社順**などさまざまな仕分け方が考えられるように（また、目的によって相応しい並べ方が異なるように）、**英文法にもいろいろな整理の仕方があるわけ**です。準動詞の用法別という切り口で説明してきましたが、副詞節の簡略化という切り口からも説明もここで紹介してみました。（むしろこちらのほうが本質に近い気もする）独立分詞構文なんていう変わり種に見えたものを、この切り口からの説明だと、独立分詞構文こそが分詞構文のスタンダードにも見えてくるから面白いのです。ちなみにこの説明だと**Vingの分詞構文もVp.p.の分詞構文も全く同じモノ**だということもはっきりしますね。。。